

国内研修成果報告書

研修先:①長崎県小値賀島 おぢかアイランドツーリズム、②長崎県出島 出島復元整備室
研修テーマ:民泊を通して地方の観光・まちおこしについて学ぶ

① 長崎県小値賀島 おぢかアイランドツーリズム

日時:02月04日 13時頃～

場所:小値賀港ターミナル内

インタビュー:理事長 前田敏幸さん.

1. まちづくりを行うことになった経緯

平成16年～平成17年にかけて行われた平成の大合併により小値賀島は近隣の市町村と合併をせず単独で政策を進めることになった。しかし第一次産業の衰退により小値賀が自立できなくなる危険が発生し外(小値賀島外)から稼ぐ、産業を成立させるために観光業に力を入れることになった。本土から島への訪問、観光は日帰りでは難しく多くの人が宿泊していた。この訪問者、観光客の満足度を高める(=リピーターになってもらう)ために小値賀島だけの魅力として人(住民)とのつながりのあるホームステイ型の民泊をスタートさせた。

2. 開始当時の問題

まちづくり、産業として民泊を行う以前から人をもてなすスタイルの島民の方々は子供向けにボランティアで行う民泊に近いことを行っていた。しかし民泊を観光業として行う＝お金が発生するということから以前よりも責任が重くなるため島民の方々に抵抗が生まれた。この抵抗を払拭するためにもおぢかアイランドツーリズムさんはまずは7件というかなり小規模な状態から民泊をスタートさせた。それと同時に地区ごとに説明を重ねた。また小さな島の特性を生かし実際に民泊に関わった方の口コミなども島民の方の意識を変える大きな後押しになったという。また“島を体験する”という魅力の大きな役割を担っているということで島民の方に自信を持ってもらったという。

また民泊だとプライベートな時間や空間が取りにくいことも課題として挙げられた。九州地方以外の人をターゲットにした場合多くの人が利用するのはホテルだが小値賀島にホテルを建設することは景観や理想としている観光業とは大きくかけ離れたものであり建設という選択肢はなかった。そこで島に存在する古民家を利用して宿泊する古民家ゲストハウスができた。

3. 小値賀島ならではの魅力

様々なスタイルで人とつながりながら宿泊ができる事。民泊は子供たちであったり教育団体を対象としている。一方でプライベートが確保されるゲストハウスは本土からの観光客や大人向けと様々な人が訪れることができるようなスタイルになっている。また最近では島民の方の民家で夕飯のみ頂く、宿泊はしないといったスタイルも始めたようだ。小値賀島では島に訪れた訪問者の方々にどんなスタイルで島に滞在したいか話を聞いてどんどん訪問者にあったスタイルになるよう変更を重ねているという。また小値賀島は五島列島(五島藩の所有地)の一部だと多くの人が思っているが

実は平戸藩の政権下にあったといひ五島列島と文化が大きく異なる。五島列島は閉鎖的、島自体は大きく広いが山が多く使える土地が少ないのに対し小値賀島は貿易で栄えた島の為外とのつながりが太く、またなだらかな土地の為人が生活しやすい土地となっている。

4. 今後の課題

今後の課題としては観光に従事する人が減少していること。島民の方の中には誇り高く農業や漁業などの本業で島を支えたいと考える方がまだまだいる事。小値賀アイランドツーリズムとしては半分観光業をして半分農業などの本業を行う形が理想ではあるが現状難しく実現できていないため理想に近づけたい。またゲストハウスなどに利用する住居に関しては空き家は多くてもそのすべてが利用できるわけではなくその多くが使えないこともあり住居の確保が難しい現状だという。さらに移住者は年間平均して 10 人ほどいるものの農業をやりたい人、役場で働く人、観光業の担い手、老後の余生など様々な目的で移住してくるため移住者に若い人が多いわけではないことも課題として挙げられるという。移住者の年齢層が幅広いことは小値賀島において 70 歳～80 歳くらいまで働いていることとつながっている。今後課題になってくる問題としては高校をいかにして島内に存続させるかということにあるという。現状学年で二桁の人数を確保しているものの人数が確保できず島に高校がないと人口減少の歯止めが利かなくなるという。高校のない島には子育て世代の移住者はほとんどないに等しく高校は何としても守りたいところだという。そして外との貿易がさかんで外から新しいもの、ことを積極的に取り入れていたこともあり郷土や伝統が少ないのが長所でもあり短所でもあるという。

5. 広報について

現在島旅ブームもあり多くの雑誌が小値賀島を取り上げたいということがあり、現状において自分たち側から売り込んだりすることはないという。しかしながら島を外に売り込むために雑誌に取り上げてもらうときは島のこだわりを理解してくれるメディアのみ協力をしているという。自分たちのコンセプトを反映してくれないメディアは NG で誰でもどこでもいいから広報をするということはないという。たとえ全国放送のメディアに取り上げられることになったとしても方向性がちがうものはせずリピーターを増やす、小値賀のスタイルを理解してくれる人を受け入れたいとのことで広報にも一定のラインを保っているという。

6. まとめ

実際に行ってみると小値賀アイランドツーリズムの方も島民の方もみなさんととてもあたたかく、リピーターが増える理由がとてもよくわかりました。島でサイクリングしていても皆さん気さくに話しかけてくださり東京では味わえないとてもあたたかい生活が送れました。とても人口が多い訳ではなく移住者も多い訳ではないけれどいつまでも今の島のスタイルを保ち続けてほしいなと思いました。また自分も再び島を訪れることにより島に貢献できればと思った。またまちづくりというものはやはり何通りもの正解がありその土地にふさわしい活性化を進めるためにはその土地の地理や住民性を理解してその土地ならではのものを進めていくことが大切と強く感じました。

② 長崎県出島 出島復元整備室

日時:02月05日 10時頃～

場所:出島復元整備室

インタビュー:学芸員 スターツ未来さん

1. 出島の復興の過程と復興に当たり課題となったこと

現在の出島は島という形ではなく完全に街の一部として存在している。出島は開国と同時に他の港に負けないようにもっと大きな船を呼び込むために埋め立て部分を拡大していったためである。しかしながら終戦後出島にアイデンティティを持たせたいという思いから100年かけて水に浮かぶ島に戻そうというプロジェクトが始まったのが復興の過程である。また復興に当たり課題となったことは用地の買収である。再び出島をもとの状態にするには一般の方の土地もありそれらを市が買って発掘調査を進めることが課題だったという。

2. 出島の強み

出島の最大の強みは等身大の出島を見ることができるところにある。復元するにあたり本当にあった出島をもう一度復元するためには調査に基づくものでないといけなため調査をしても解明されなかった物は外観は作れても中身は空洞のままにしているという。よって出島にあるものは書面だったり絵であったり発掘されたものであったりと証拠があったものである。

3. 観光客について

昨年の来場者数は年間50万人といい確実に観光客は増えてきているといいこれは復元が進んだからだとスターツさんはいう。また2017年に大きな復元として表門が完成した。これに伴い表門まで大きな橋が架かることになり出島をまた島として復元したいという整備室として大きな一歩であったという。しかしながら表門は証拠が出てこなかったためあえて近代的、また実際の長さよりはるかに長くすることにより観光客の勘違いを防いだそうだ。

4. 連携について

連携については博物館など整備室が持っていない情報であったり出土品については快く協力していただけているという。また出島内にあるミニ出島は毎年工業高校生がリフォームを行っているといい地元との連携も保っていた。また出島内のレストランは出島独自の料理を民間につくってもらったりしているといい民間との連携もあった。

5. 住民の方の意見

住民の方の中には「昔から外国とは関わってきたから」といって出島の復元に資金援助をしてくださる人もいるそうだ。しかしながら出島の復元費用は市の予算から出ていることから復元するなら保険料や年金をあげてほしいという声もあるそうだ。それでも出島復元整備室としては自分の地域の歴史を作るものであるから復元をやめることはしたくないそうで理解を得るために1件1件回って説明を重ねている。また市役所の管轄の為出島のトップが変わることが度々あるそうだがその時のあいさつは必要なもので繰り返し行っているという。

5. 今後の展開

現在文化財である出島の扇形部分の用地買収は済んでいるというがそれではだめだとスターツさんは仰っていた。出島の周りには杭が打たれていてその範囲まで文化財の範囲を拡大する

ことが今後の展開方針だという。今のままだと極端な話出島のすぐ隣を埋め立てて構想ビルを建てるのが可能でそうはならないように文化財としての認定を目指すそうである。

6. まとめ

歴史の授業の一部でしかなかった出島をそのもの単体で見るとやはり歴史が深いなと感じました。復元に対する面でも証拠のないものは作り上げないとあり小値賀島でも感じましたがやはりまちづくりにはそれぞれの絶対に譲れないところがないと最後まで進めることが出来ないしそれがないのであれば住民の方などの理解は得ることはできないのではないかと考えました。加えて協力してほしい相手(住民や企業など)には繰り返し顔を合わせて話をしたり自分たちの方針だったりプランを話すことは必ず必要なことだと思いました。またスターツさんの自分の地域の歴史を作るという言葉は、直ぐに成果が出ないこともあったり地域住民の方に直接利益が出ないこともある中で非常に重要なポイントに感じました。